

## 西郷隆盛の思いを籠めた留魂碑

西郷隆盛の無二の理解者、勝海舟

鹿児島玉龍高校卒八期

西山 和宏

かねてから思っていた東京大田区・洗足池の「留魂碑」と港区・芝田町の「江戸開城会見の地」を訪れた。また、島津斉彬が誕生した薩摩藩上屋敷跡、芝さつまの道、泉岳寺なども訪れることにした。



平成 28 年 3 月 30 日、花見がてら洗足池を訪れた。桜は三分咲き、日差しは穏やかな散策日和であった。

薩摩藩上屋敷跡の港区・芝三田から洗足池駅へは直線で約 7 km、五反田駅で乗り換えて 30 分足らずの距離、その間に泉岳寺がある。

「留魂碑」に刻まれた漢詩「獄中有感」は、西郷隆盛が沖永良部島に流され、尊皇の志を果たすために、本土の土を踏むことは2度とないという思いをこめて作られた。

西郷隆盛の最良の理解者と自負する勝海舟が、西郷の死後、「獄中有感」を刻した「留魂碑」を建てた。その碑は、現在、大田区・洗足池の勝海舟夫妻の墓の傍らにある。



「留魂碑」を訪ねる一行（左から）、竹之内望彦、村上久、中間一範、西山和宏、安倍洋子、吉松典子、（この写真にはないが）崎元雄厚、満留紀弘、角洋子。

「江戸開城会見の地」は、薩摩藩上屋敷から徒歩約10分、当時は江戸湾に面した蔵屋敷であった。西郷と勝によって、江戸を戦場にすることなく、無血開城に導いた場所である。

そこから最寄りの地下鉄三田駅から1駅のところに、赤穂義士の墓所泉岳寺がある。ここも薩摩と無縁ではなく「赤穂義臣伝輪読会」は「妙円寺詣り」「曾我どんの傘焼き」とともに薩摩の3大行事として、「郷中」の行事として藩政時代から行われてきた。

きて、西郷隆盛が、「獄中有感」を作るまでの経緯をたどると、その心境の一端を窺い知ることができる。

西郷は、安政5年（1858年）11月16日、後に安政の大獄と呼ばれる大老井伊直弼い い なおすけの厳しい追及にあい、京都清水寺成就院の月照とともに身の置き所がなくなり錦江湾竜ヶ水沖きんこうわんりゅうがみずで入水した。

このようなことになったのは頼るべき第11代藩主島津斉彬なりあきらが、これより4カ月前の7月16日に病没したことがある。

西郷は、斉彬の死去で、それまで積み上げてきた尊皇運動の努力が瓦解し、失意の淵に落ち、生きる望みすら失った。鹿児島に帰って斉彬の墓前で殉死を覚悟したが、月照に、斉彬の遺志を継いで国のために尽くすべきだと滾々こんこんと諭されて殉死を思いとどまった。

竜ヶ水での入水で、月照は死亡したが西郷は蘇生した。幕府の追及から隠すために、西郷も死亡したことにして、安政6年（1859年）1月12日、菊池源吾と名を変え、奄美大島・竜郷村たつごうで潜居を始めた。時に33歳。鹿児島へ戻ったのは、文久2年（1862年）2月12日、3年1カ月の島暮らしであった。

2度目の島送りは、久光の命令を無視したとして行われた。その頃の状況をみてみよう。

文久2年2月11日、第13代将軍徳川家茂と皇女和宮の婚礼が行われた。これで、「公武合体」にムードが高まった。しかし、それは「幕府を主、朝廷を従」、少なくとも「幕府と朝廷を対等」とする公武合体であった。

これに対して、斉彬が目指していたのは「朝廷を主、幕府を従」とする「公武合体」であった。斉彬は、これの推進を久光に遺言した。久光は、その遺言に忠実であった。

斉彬なりあきらの亡き後、第10代藩主島津斉興なりおき（斉彬・久光ひさみつの父、第12代

藩主島津忠義<sup>ただよし</sup>の祖父)が忠義の後見として藩政の実験を握った。久光は、斉興の死後、ようやく藩主忠義の父「国父<sup>こくふ</sup>」に遇され、重富から鹿児島城に移ったのは、文久2年(1862年)2月24日であった。

久光は、藩政の実権を握ると、斉彬の遺志を継いで朝廷を主体とした「公武合体」を進めるための準備を始めた。これは、兵を率いて上京し、朝廷から叡旨<sup>えいし</sup>(天皇の言葉)をいただいて、井伊直弼の弾圧政治を排し、一橋慶喜<sup>ひとつばしよし</sup>を将軍世子に、松平慶永<sup>よしなが</sup>を政事総裁にするなど幕府の改革を求めるものである。

文久2年3月16日、約千人の兵を率いて鹿児島を出発した。これに先立ち、京で「公武合体」運動を展開するために、公家、諸大名、幕府の重役、諸藩の重役など天下の要人に人脈を持つ西郷が必要という声が澎湃<sup>ほうはい</sup>として起こった。久光は、西郷の人望の高さに驚き、本意ながら島から召喚を許した。

引兵上京の準備、これに反対する藩の重役入れ替え、西郷の召喚などを進めたのは、大久保利通である。西郷の召喚、引兵上京で、いよいよ討幕かという機運が西日本で盛り上がった。

しかし、西郷は久光に「順聖公<sup>じゅんしょうこう</sup>(斉彬)が4年前になさろうとしたことを実行しようとするのであれば、当時と今日では状況が変わりました。順聖公は天下の信望があり、朝廷と幕府の内部に同志がおり、雄藩とも同盟して遺漏なき準備をした上での引兵上京をなされようと思いました。失礼ではありますが、公(久光)は無位無官、公家とも雄藩諸侯とも昵懇の方がおりません。いわば地ゴロ(田舎者)であります。そのような公が、現在の状況で、京に上って成功するとは思われません」と言い放った。それでも久光が引兵上京の計画を中止することはなかった。

西郷は大久保の説得によって、引兵上京への同行を承服した。久

光は、西郷に九州諸藩と長州藩の情勢を視察し、下関で待って、報告せよと厳命した。西郷は村田新八をともなって、3月13日、久光よりも2日前に鹿児島を出発した。

久光は、3月28日に下関に到着したが、西郷は、待ってはいなかった。代わりに「九州および長州の有志が、薩摩藩引兵上京で、いよいよ薩摩が討幕に立ち上がった早合点して、多数の諸藩藩士や勤皇浪士が大坂に集まり、爆発寸前であるから、これらを説得し鎮めるために、大坂に急行する」という置手紙が残されていた。

久光は下関で待てという命令を無視したと激怒した。西郷の起用を進言した大久保も同罪でけしからん、西郷ともども大久保も調べるように命じた。しかし、大久保は、西郷が取った行動は適切なものだと思っていた。

大久保は、下関から海路大坂へ急行し、西郷に会って事情を聞くと、案の定、西郷は長州藩の久坂玄瑞くさかげんずいなどにも早まって決起しないように、今回の引兵上京は公武合体を推進するためであって、討幕ではないことを説明し、爆発寸前の諸藩の藩士の鎮静に努めていた。

西郷には、それができる人望と統制力があつた。「自分が京坂の地にいなければ、いっぺんに爆発する」とすら、西郷は言った。大久保は、京坂の地での西郷の統制ぶりを報告すれば久光も納得すると樂觀していた。しかし、久光は、そんな西郷の人望と統制力がたまらなく嫌いであつた。

ところが、徒歩目付かちめつけとして先発上京していた有村俊斎しゅんさいは、姫路で久光の行列を待ち受けて、西郷が浪人志士に討幕活動を起こすように画策していると間違つた報告をした。俊斎は、4年前、西郷から月照を鹿児島まで護衛するように依頼されたにもかかわらず、その役目を途中で放棄したことがあつた。

俊斎に置き去りにされた月照を幕府の追捕から逃れつつ鹿児島へ

---

送り届けたのは福岡藩士平野國臣<sup>くにのみ</sup>。その後、國臣は誠忠組と連絡を取るために2度目の薩摩入りをしたが、久光は鹿児島城下入りを許さなかった。

伊集院で足止めをされ、鹿児島を去るとき「わが胸の燃ゆる思いに くらぶれば 煙はうすし 桜島山」と、坂木六郎（有馬新七の叔父）宅で胸のうちを詠じた。



久光の側近、堀仲左衛門（伊地知貞馨<sup>いぢちさだか</sup>）も姫路で、久光に西郷が京や伏見の藩邸で若者を扇動していると報告した。堀は、前年、江戸での工作に失敗し、大坂に来て藩邸に浪人志士を集めていたことを西郷に咎<sup>とが</sup>められた。

久光は、元々、西郷を嫌っていたが、有村と堀の報告は、西郷を罰するに十分な確証をもたらした。

大久保は、久光が西郷に切腹を命ずると思った。そうになると、それまで積み重ねてきたことが水泡に帰してしまう。それなら、刺し違えて、自分も一緒に死のうと、大久保は西郷に言った。

大島帰りの西郷は、こんなことでは死ねない、なんとか生き延びて本望を遂げたいと大久保を説得し、死ぬことをやめさせた。

西郷は、文久2年（1862年）4月11日、村田新八<sup>しんぼち</sup>、森山新蔵とともに藩の汽船天祐丸<sup>てんゆうまる</sup>で鹿児島に送還された。

それから12日後、「私がいなければ爆発しますよ」という西郷の予告通り、4月23日、寺田屋事件が起きた。これは、久光が進める公武合体では、もはや生ぬるい、関白九条尚忠<sup>ひさただ</sup>（娘夙子<sup>あさこ</sup>は孝明天皇の後、孫節子<sup>さだこ</sup>は大正天皇の後）と京都所司代酒井忠義<sup>ただあき</sup>の邸を襲撃して討幕の狼煙をあげようと、伏見の船宿寺田屋に集まった薩摩藩を中心に尊皇の志士たちを久光の命令によって処罰したものであった。

討たれた者も討った者もその多くは誠忠組であった。このとき、同時に決起する長州藩士は長州藩邸に集合していた。

西郷が下関から京・大坂に急行したのは、このような爆発と悲劇を避けるためであった。

ところが、尊皇攘夷派を鎮圧した寺田屋事件によって、久光への朝廷の信認が高まり、公武合体を進めるために、勅使大原重徳しげとみを擁して、幕府改革を促すために江戸に下ることになった。

久光は、洋式装備の藩兵約千人の武力を背景に、一橋慶喜（徳川慶喜）を將軍後見職、前福井藩主松平慶永を政事総裁職に任命する幕府改革を実現した。これは、今は亡き斉彬が目指したものであった。おそらく、この時期は、久光にとって人生の絶頂期であったろう。

好事魔多し、生麦事件は、江戸から帰途に起こった。このとき、リチャードソンに切りつけた奈良原繁は、寺田屋事件で、その腕を見込まれて派遣された鎮撫使の1人であった。

鹿児島に送還された西郷と村田新八は、城下に入ることを許されず山川港で風待ちもあって鯉船に2ヵ月も留置され、西郷は徳之島（後に沖永良部おきのえらぶに変更）、村田は喜界島きかいがしまを流謫地るたくとされた

西郷は久光を好きではなかったが、それ以上に久光は不遜な態度の西郷が嫌いであった。そのため、鹿児島へ帰参がかなうことはないと感じていた。ましてや、以前のように、京坂や江戸で天下国家のために奔走できる日が訪れることなど夢想だにできなかった。

「獄中有感」は、そのような覚悟と心情で詠まれた。なぜ西郷が月照と錦江湾竜ヶ水沖で入水せざるをえなくなったのか、その経緯の説明は長くなるので、後に述べることにして、



まず「留魂碑」に刻まれた「獄中有感（留魂碑）」を見ることにする。

この詩の意味は、  
「朝<sup>あした</sup>に主君から恩愛を受け優遇されたが、夕べには穴に生き埋めにされるような人生の浮き沈みは、天気が急に変わるようなもので予測できない。しかしながら、葵<sup>あおい</sup>の花は日が照らず曇っているときでも常に太陽に顔を向けている。

獄中有感（留魂碑）

沖永良部島に流されていたときに作詩

朝蒙恩遇夕焚抗

朝<sup>あした</sup>に恩遇を蒙<sup>こうむ</sup>り、夕に焚抗<sup>ふんこう</sup>せらる

人世浮沈晦明似

人世の浮沈、晦明<sup>かいめい</sup>に似たり

縦不回光葵向日

縦<sup>たと</sup>ひ光を回<sup>めぐ</sup>らさずとも、葵<sup>あおい</sup>は日に向ひ

若無開運意推誠

若<sup>も</sup>し運を開く無くとも、意は誠<sup>まこと</sup>を推す

洛陽知己皆鬼為

洛陽の知己、みな鬼と為り

南嶼俘囚独窃生

南嶼<sup>なんしよ</sup>の俘囚<sup>ふしゆう</sup>、独り生<sup>ぬす</sup>を窃む

生死何疑天附与

生死何ぞ疑はん、天の附与なるを

願留魂魄護皇城

願はくば魂魄<sup>こんぱく</sup>を留めて、皇城を護らん

今は囚われの身の自分ではあるが、心は常に天朝を向いている。たとえ青天白日の身になることがなくても、いつまでも忠誠を貫き通す覚悟である。京で一緒に勤皇のために働いた同志は（安政の大獄で囚われ）殺されてしまった。それなのに、自分1人、南の島に囚われの身で、のうのうと生き延びている。

しかし、人の生死は天命であって、どうすることもできない。もし、このまま南の島でこの身が朽ち果てるとしても、魂は、この世に留まって、皇城（天朝）を守護したい。」

この詩は、島津斉彬の日本を守るために働く、そのために天朝（天皇）をたてるという遺志を詠っている。

西郷は、幕府を倒して、天皇の下に日本を統一し、明治4年には廃藩置県を行い、これによって斉彬から遺託された役目を果たした。

日本統一の目的は、外国の侵略から日本を守るために、富国強兵を進めることである。富国強兵には日本統一が必要であった。

勝海舟は、そのような西郷の心情を酌むことができた唯一の男だと自負していた。また、勝も、そのような日本統一を目指していた。

西南戦争からわずか1年半後、戦費負担で国家財政は危機に瀕していたとき、勝海舟は、私財を投じて「獄中有感」を碑に刻した「留魂碑」を建立した。

勝海舟は、西郷隆盛を最もよく理解する者は自分だと宣言するかのよう、この碑を建立した。海舟は隆盛とともに、明治維新前夜の日本の国を思う初心を生涯貫き通した数少ない人であった。

慶応戊辰之春。君率大兵而東下。

慶応<sup>ぼしん</sup>戊辰の春、君大兵を率いて東下す。

人心鼎沸。市民荷担。

人心<sup>ていふつ</sup>鼎沸、市民荷担す。

我之憂。寄一書於屯營。

我<sup>これ</sup>之を憂へて、一書を屯營に寄す。

君容之。更下令戒兵士驕傲。

君<sup>きみ</sup>之を容れ、更<sup>あらため</sup>て令を下して兵士の驕傲<sup>きようごう</sup>を戒め、

不使府下百万生靈陷塗炭。

府下百万の生靈<sup>いきりよう</sup>をして塗炭<sup>とたん</sup>に陥らしめず。

是何等襟懷。何等信義。

これ何らの襟懷<sup>きんかい</sup>、何らの信義ぞ。

今君已逝矣。偶見往時所書之詩。

今君<sup>すで</sup>已に逝<sup>ゆき</sup>たり。たまたま往時書する所の詩を見る。

氣韻高爽。筆墨淋漓。恍如視其平生。

氣韻<sup>きいん</sup>高爽<sup>こうそう</sup>、筆墨淋漓<sup>ひつぼくりんり</sup>、恍として其の平生<sup>へいぜい</sup>を視るが如し。

欽慕之情不能自止。刻石以為記念碑。

欽慕<sup>きんぼ</sup>之情、自ら止む能はず、石に刻して以て記念碑と為す。

嗚呼君能知我。而知君亦莫若我。

ああ君よく我を知れり、而して君を知る亦我に若くは莫<sup>な</sup>し。

地下若有知。其將掀髭一笑乎。

地下もし知る有らば、それ將<sup>まさ</sup>に掀髭<sup>きんぜん</sup>一笑せんか。

明治十二年六月

友人勝安房誌

明治十二年六月

友人勝安房誌す

前頁、漢詩の終わりにある「掀髭一笑」は、髭の端を掀起あげながら、にっこり笑ってとその通りだという様子を表している。

海舟は、隆盛が征韓論者ではなかったと、擁護することをはばからず、私財を投じて「留魂碑」を建立した。その碑の裏に、江戸開城に際して、隆盛は戦火を避け江戸市民を塗炭の苦しみに陥れることなく、平和裏に処理してくれたと刻した。

さて、我々一行は、2016年3月30日11時すぎ、中原街道添いの洗足池駅（東急池上線：五反田駅から6駅）で落ち合い、歩道橋を渡るだけで到達できる洗足池へ猿来だした。

洗足池の名は、その昔、この地を訪れた日蓮上人が足を洗ったことに由来する。そこに、薩摩に縁がある「名馬池月」の像があったのは驚きであった。「名馬池月」を祀る千束八幡神社への石段を登り、池の淵を巡り、勝海舟夫妻の墓へ詣でた。



安政5年（1858年）11月16日、竜ヶ水沖での入水より前の9月7日、京で梅田雲浜（小浜藩士）の捕縛を第1号として安政の大獄が始まった。

10月23日、徳川家一門の越前福井藩主松平慶永（春嶽）の懷刀橋本左内が捕縛され、翌年10月7日に斬首（享年26歳）。この他に、吉田松陰（長州藩士）、頼三樹三郎（京都町儒者、父は頼山陽）、

## 留魂碑

信海（月照の弟）など100名以上が捕縛され、10数名が斬首また獄死した。

嘉永6年（1853年）6月3日のペリー来航以降、憂国の士が澎湃として多数現れたが、安政の大獄が起こるまでは、幕府を倒せという声も運動もなかった。



天皇を精神的な支柱として、幕府を政治の中心として、挙国一致の体制を整え、外国の脅威に備えるための運動が行われていた。

国学者として井伊直弼の師であり、後に家臣になる長野主膳の周到な画策によって、直弼は大老になった。

紀州慶福の世子決定も勅許なしの条約調印も、長野主膳の発想によって、直弼が実行した。皇女和宮の降嫁も長野主膳の発想であった。このような長野主膳の発想と直弼の措置に反対する者を捕えて厳罰に処したのが安政の大獄である。

過酷な安政の大獄のやり方に反発して、幕府を倒せという声が起こった。繰り返し述べると、安政の大獄の前は、上に朝廷をいただいて、幕府中心の政治を行う公武合体の推進であった。安政の大獄に

よって、公武合体では生ぬるい幕府を倒せと過激なものになった。

安政の大獄は、どのようにして起こったのか？

13代将軍徳川家定<sup>いえきだ</sup>には跡を継ぐべき実子も養子もなかった。家定の父徳川家慶<sup>いえよし</sup>には多数の側室がおり、14男、13女の27人の子供をもうけたが成人したのは4男の家定のみであったが、その家定は病弱で、世継ぎ誕生の見込みはなく、後継者として養子を選ぶ必要があった。

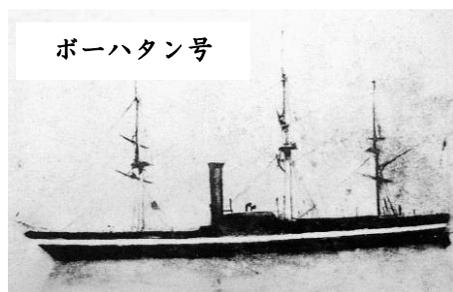
後継候補者は、南紀派が推す現将軍に血筋の近い徳川慶福<sup>よしとみ</sup>（後の家茂<sup>いえもち</sup>）と一橋派が推す英邁<sup>ひつぽしよしのぶ</sup>な一橋慶喜<sup>ひつぽしよしのぶ</sup>（後の徳川慶喜）の2人。

保守的な南紀派は、井伊直弼<sup>ただなか</sup>（彦根藩主）を筆頭に、松平容保<sup>かたもり</sup>（会津藩主）、水野忠央<sup>ただなか</sup>（紀州徳川家付家老）など。

一橋派は、慶喜の実父徳川斉昭<sup>なりあき</sup>（前水戸藩主）、阿部正弘<sup>まさひろ</sup>（備後福山藩主、老中首座）、島津斉彬<sup>なりあきら</sup>（薩摩藩主）、松平慶永<sup>よしなが</sup>（春嶽、越前福井藩主）など。

一橋派は、外圧を受けて難局を乗り切るためには、英邁な慶喜を将軍に就け、開明思想の外様の雄藩も参画して日本国の運営をしようというものである。南紀派は、あくまでも外様雄藩の参画には反対であった。両派對立の根底は、権力闘争でもあった。

井伊直弼は、安政5年（1858年）4月23日、大老に就任。6月19日、岩瀬忠震<sup>ただなり</sup>（目付、一橋派の幕臣）と井上清直<sup>きよなお</sup>（下田奉行）の2人は、直弼から事前に了解を得て、神奈川・小柴沖停泊の米国汽船ボーハタン号上で日米修好通商条約に調印した。その後の万延元年（1860



年)、咸臨丸で太平洋を横断し、サンフランシスコへ渡航計画を立てたのは岩瀬忠震であった。

この調印は、勅許を得てから行うためにと、7月27日まで延期を約束されていた。

ところが6月13日、下田に入港した米国汽船ミシシッピー号は「英仏と中国の戦争(アロー号戦争)で、清国朝廷は英仏の要求通りの条件で講和条約を結んだ。その英仏の連合艦隊が、開国を求めて日本に向かっている」という情報をもたらした。

タウンゼント・ハリス(初代駐日米国弁理公使)は、翌日の14日、この情報を幕府に伝えた。16日には、ブチャーチンがロシア船で下田にやってきて、これも英仏の連合艦隊が日本に向かっているという情報をもたらした。

戦勝の勢いに乗った英仏艦隊が、どのような開国条件を要求するか幕府は恐怖の極に達した。そこへハリスが、今すぐ米国と条約を結ぶなら、英仏との交渉は、自分が間に入って、中国のようにはさせない。また、アヘンの持ち込みもさせないと条約調印を求めた。

ハリスは、一隻の軍艦も用いることなく、日本と条約を結んだと、本国で高い評価を受けた。しかし、その後、英仏の連合艦隊が日本に押し寄せることはなかった。

条約調印の6月19日から3日目、6月22日、幕府は在府の諸大名を総登城させ、危急事態を避けるためにやむなく条約調印を行ったと発表した。

御三家・三卿は、総登城には当主は登城せず、家老を代理登城させることになっていた。一橋慶喜(一橋徳川家当主、徳川慶喜)は、翌23日に登城して、初対面の直弼を詰問した。

6月24日、一橋派の徳川慶勝(尾張藩主)、徳川斉昭(前水戸藩

主)、徳川慶篤よしあつ(水戸藩主)、松平慶永よしなが(福井藩主)らは登城して、直弼を、勅許を得ずに行ったと厳しく詰問した。直弼は、言を左右にして、のらりくらしらった。しかし、双方の対立は激烈であった。特に斉昭の怒りは激しかった。

井伊家は、その夜の水戸家の動きを警戒し、午後10時ころ城から下がる直弼の供回りを2倍に増やして警戒するほどであった。桜田門外の変の火種はここに端を発したともいえる。

その翌6月25日、慶福よしとみ(数えで13歳)を將軍の世子せいし(後継者)にすることを発表して、直弼は後継者争いにケリをつけた。

徳川慶勝、徳川斉昭・慶篤父子、松平慶永などが、登城した6月24日は、定められた登城日ではなく「不時登城」であった。普段ならさほどの咎めはなかったであろうが、直弼は「不時登城」を理由に、7月5日、將軍家定の名で、一橋慶喜、徳川慶篤、徳川慶勝、松平慶永、徳川斉昭など徳川家親藩一門まで、隠居・謹慎・蟄居にして、一切の政治活動を封殺した。

ところが、7月1日、將軍発病、脚気。7月3日、將軍重態。水戸藩では7月4日將軍死去、井伊家では7月6日將軍死去と記録されたが、公式発表は8月8日の死去であった。斉昭らへの処分は、將軍家定の名で7月5日に行われていた。

日米修好通商条約の交渉は、安政4年(1858年)12月11日、老中首座堀田正睦まさよし(下総佐倉藩主)の下、下田奉行井上清直きよなお(御家人上りの旗本、川路聖謨かわじとしあきらは実兄)と目付岩瀬忠震ただなりを全権として開始された。堀田正睦は蘭方医佐藤泰然たいぜんを招いて佐倉順天堂を開かせ、これが後に順天堂大学に発展した。



調印前の条約案文について、幕府内部も諸大名も猛烈な反対であった。その反対を抑えるために、井上と岩瀬は、勅許を得て全国に布告することを提案し、老中首座堀田正睦が認めた。

ペリー来航直後とは状況が変化し、松平春嶽や島津斉彬をはじめ他の有力大名にも条約締結を容認する雰囲気があった。また、朝廷でも前関白鷹司政道や関白九条尚忠ひきただなども反対ではなかった。

そのような状況を背景に、本来なら必要のない朝廷の承認として勅許を得ることを思い立ち、堀田は公卿買収資金3万両を準備し、岩瀬を伴って安政5年2月5日京に上った。孝明天皇に金屏風と黄金50枚、准后（孝明天皇の母）には絹反物と白銀200枚、その他幕府との取次役などにも金品をばらまいた。

西郷と橋本左内は、その堀田老中を京に追いかけて、条約の勅許獲得の運動を支援するかわりに、慶喜を後継者にする勅許獲得での協力を求めた。この頃、老中首座の堀田と西郷や橋本左内は、互いの目的を達成するために協力できる関係にあった。

しかし、中級・下級公家88人の座り込み抗議などがあって、元々夷狄いてき嫌いの孝明天皇は、3月20日、条約締結への勅許を拒否した。

3月22日、将軍後継者については「英傑・人望・年長」の条件を備えた者を選ぶべしと堀田に伝えることになっていた。これは慶喜を選ぶというものであった。

ところが井伊直弼の家臣で、政治顧問でもあった長野主膳らが工作して関白九条尚忠を抱き込み、先の3条件を外して、衆議を尽くして選べと堀田に伝えさせた。堀田は、4月20日、条約締結を承認する勅許を得られないまま悄然として江戸に戻った。

梁川星巖やながわせいがん、梅田雲浜うんびん、頼三樹三郎らいみ きさぶろうなどの浪人志士たちが、公家たちに攘夷論を吹き込み、条約締結に反対させた。これで後に、安政の大

獄で捕縛されることになる。

進歩派の堀田が江戸を留守の間に、保守派は主導権を握るための準備を整え、4月23日、井伊直弼が大老に就任した。

このようなとき、強力な後ろ盾になるはずの阿部正弘は、前年の安政4年6月17日に死去して、すでにはいない。島津斉彬は、参勤交代で江戸ではなく鹿児島にいた。

このような状況で、西郷は途方に暮れ、斉彬の指示を仰ぐために、5月17日、江戸を出立、途中、京・大坂で有志と意見と情報を交換しながら、6月7日、鹿児島に帰着した。ただちに、斉彬に拝謁した。斉彬は西郷から詳細な状況報告を受けて、重大な決心をした。

井伊直弼の大老就任で、幕府の重役も諸大名も、その権勢を恐れて息をひそめ、斉彬が阿部正弘から引き継いできた幕政改革の道は閉ざされた。

この閉塞した状況を打破するために、斉彬は禁裏守護の名目で、兵を率いて京に上り、勅許を得て幕政改革の断行を決意した。京に上る準備として、周辺への根回しと時期をはかるために、西郷に京・大坂への出立を命じた。

帰鹿から10日ほど後の6月18日、西郷は鹿児島を出発。京へ向かう途次、筑前福岡藩主黒田<sup>ながひろ</sup>長溥（斉彬の2歳年少の叔父）に会って、これまでの経緯を報告し、協力を依頼して、7月7日、大坂藩邸に入った。

条約調印は、この間の6月19日に行われた。直弼は、老中と幕府高官の入れ替えを行い、25日、將軍後継者を慶福に決定したと発表した。その翌日、条約調印を朝廷に説明し、勅許を得るために、新任の老中<sup>まなべあきかつ</sup>間部詮勝（越前鯖江藩藩主）を京に上らせた。また、酒井<sup>ただあき</sup>忠義（若狭国小浜藩主）を京都所司代に任じた。間部と酒井は、京で、一橋派と尊皇攘夷派の弾圧を徹底的に行った。吉田松陰は老中間部の

暗殺を計画するほどであったが、桂小五郎などの反対で中止した。

大坂藩邸に入った西郷の動きは、常に幕吏に監視され尾行されていたため、月照が近衛家との連絡係を務めた。

西郷は、7月14日、大坂藩邸留守居役で大親友吉井友実とともに京に入り、<sup>やながわせいがん</sup>梁川星巖、<sup>うんびん</sup>梅田雲浜、<sup>らいみきさぶろう</sup>頼三樹三郎、<sup>しょういん</sup>吉田松陰、<sup>さなひ</sup>橋本左内などの尊皇攘夷派に会って、昨今の情勢について情報交換をし、話し合った結果、「直ちに、兵を率いて上京されたい」と、齊彬に急使を送った。

朝廷から幕政改革の詔勅を得て、武力を背景に、直弼の暴圧政治を制するつもりであった。



1872年（明治4年）頃の  
磯地区集成館事業関連建物

そのころの薩摩には、齊彬が西洋の機械文明を積極的に取り入れ、洋式帆船や汽船の造船所、反射炉（製鉄所）、兵器工廠で洋式鉄砲・火薬生産、電信機設置、紡績工場などがある工場団地のようなもの

があった。兵式は洋式に編成替えが行われ強力であった。

ところが、斉彬は、7月5日、鹿児島・天保山で京への率兵訓練中に倒れ、16日には死去した。西郷が、この知らせを受け取ったのは7月24日。西郷、ときに32歳。それまで積み上げてきたものが一挙に瓦解し、人生の絶頂から奈落の底へ落された思いであったろう。

9月7日、京で梅田雲浜の捕縛によって、安政の大獄が始まった。その直前の9月5日、近藤茂左衛門もぎえもんが捕縛されたが、後に釈放された。梁川星巖は、その直前の9月2日コレラで死去、代わりに妻の紅蘭こうらんが9月8日に捕縛されたが、翌年2月釈放された。

ここで梅田雲浜について少し述べる。越前小浜藩士おばまの家に生まれ、早くから学才を認められ、江戸に出て学問を修めた。天保14年(1843年)、京で小浜藩の委託塾望楠軒ぼうなんけん なんこう(楠公；楠正成を望む)の講師になった。ところが、ペリー来航の前年嘉永5年(1852年)、藩主酒井忠義ただあきの施政をたびたび批判して藩籍を剥奪された。それに懲りず開き直って、尊皇運動に挺身しようと覚悟をきめた。収入の道を断たれ生活は困窮を極めた。

安政元年(1854年)9月、ロシア軍艦が突如大坂湾に現れたとき、十津川郷士は、雲浜を首領として、これを打ち払うため大坂に向かった。そのとき、雲浜は「訣別けつべつ」と題する有名な詩を残した。

「妻は病床ふしこに臥し児は飢えに叫ぶ 身を挺して直ちに戎夷じゅうい(南蛮人)に当たらんと欲す 今朝死別こんちょうしべつと生別せいべつと 唯皇天后土ただこうてんこうどの知る有り」  
(妻は病の床に臥し児は飢えに泣き叫んでいる。自分はこれより一身をなげだして攘夷を決行しようと思っている。今朝の別れは死別となるのか生別となるのか。それは天地神明が知るのみである。)

しかし、雲浜が大坂に着いたときには、すでにロシア軍艦は退去

した後であった。京に戻ったが貧窮は続き、病床の妻は翌年3月、長男はその翌年5歳で亡くなった。

雲浜は尊皇の念も厚かったが商才にも長けていた。妻子を亡くした後、その商才を見込まれて長州藩から「物産御用掛」に任じられ、京・大坂で交易を指導、多額の周旋料を得て、生活は派手になった。

ついでに、もう1つの有名な詩について述べる。雲浜の門人赤根武人（長州藩士、奇兵隊総管）は幼少のころ、周防国大島郡遠崎村妙円寺の住職釈月性（尊皇攘夷僧、1817～1858）に学んだ。

「將に東遊せんとして壁に題す」という詩を残した。

「男児 志を立てて郷閭を出づ 学 若し成る無くんば復た還らず 骨を埋める 豈墳墓の地を期せんや 人間 到る処に青山あり」は、月性の作である。

安政の大獄で、一橋派や尊皇攘夷派とみなされた者、つまり直弼のやり方に反対する公家、大名、志士、学者、僧侶、大町人、大百姓など100名以上が捕縛され罰せられた。その大獄は、安政7年3月3日、直弼の桜田門外での暗殺まで続いた。

さてここで、月照について、なぜ西郷と一緒に死のうとまでしたのか、月照が勤皇の志が厚い僧侶というだけでは説明が足りない。

月照は讃岐出身の大坂の医師玉井鼎齋の長男。文政10年（1828年）、15歳のとき、父の実弟で清水寺成就院の住職蔵海を頼って寺に入った。成就院は格式が高く、平民出身では将来住職になれないので、権中納言基茂の猶子（相続を目的としない親子・兄弟関係）になり、名を久丸と改めて寺入りした。得度して中将坊忍鎧、後に忍向と改めた。

天保6年、23歳のとき、叔父蔵海を継いで成就院の住職になった。

その後、皇室関係の法要や読経に参加し、江戸に下っては、将軍に拝謁し金子や綿入小袖を拝領するなど、世に知られた名僧であった。

ペリー来航の前年、嘉永5年（1852年）、41歳の月照は、清水寺全体の事務をみるようになっていたが、この年の10月、突然、寺を出て東北地方の視察に出かけ、翌年2月、帰京した。この旅の目的は謎とされている。

その間に、実弟の信海しんかいが成就院の住職を継いだ。当時、清水寺を支配していた奈良の一乗院は、月照に清水寺内の居住を禁じた。このとき、薩摩藩士で近衛家の侍医でもあった原田才輔さいすけつねのぶ経允が、近衛家にとりなしを依頼して、月照は成就院で実弟と同居できるようになった。

このような出会いから、月照は近衛家の祈禱僧になり、先に述べた梅田雲浜、梁川星巖、頼三樹三郎、吉田松陰、橋本左内などの尊皇攘夷派と志を同じくする近衛忠熙ただひろその他の公家との連絡役を引き受けるようになった。温厚と評された月照でも、何かせざるにはいられないほど、当時の心ある人々には日本が外国に侵略されそうだという危機感があった。

さて、薩摩藩と近衛家との関係は、次のようなことによるものである。

薩摩藩第3代当主島津網貴つなたかの娘亀姫は五摂家筆頭の近衛家久いえひさ（後に太政大臣）の正室、家久の母は靈元天皇第二皇女の憲子内親王、家久の伯母近衛熙子ひろこは6代將軍徳川家宣御台所。

島津齊宣なりのお（第9代藩主、第8代藩主島津重豪しげひでの長男）の娘郁姫いくひめ（文化4年：1807年3月5日誕生）は、17歳のとき近衛家当主近衛忠熙このえただひろと婚約興入れに際し、幾島いくしま（当時は藤田）や有馬四郎兵衛しろうべえなどが島津家から付け人として近衛家に入った。

幾島は島津家から八人扶持（1日米4升）と銀5枚の給金をもらっていたが、郁姫がなくなると役得がなくなり、懐具合がきびしくなった。そこで、斉彬の用人山田壮右衛門を通して、斉彬に伝えると「近衛様御用に精勤」している、給金を30両増額してくれた。

四郎兵衛は、弘化4年（1847年）、63歳で亡くなるまで、京にいて、10年以上、近衛家に仕えた。寺田屋事件で壮烈な死を遂げた有馬新七は、四郎兵衛の長男。新七は、学識深く、諸藩の有志とも広く交際があった

郁姫は嘉永3年（1850年）3月29日、43歳で亡くなったが、幾島は、出家してその後も近衛家に留まり菩提を弔っていた。今和泉島津家の当主島津忠剛の長女於一（後の篤姫、天璋院）が、島津斉彬の養女、右大臣近衛忠熙の養女を経て、安政3年（1856年）、13代將軍徳川家定の御台所に輿入れしたとき、幾島はお付き年寄りとして大奥に入った。

ついでながら、郁姫の子孫に、曾孫の近衛文麿（元総理大臣）、来孫（玄孫の子）の細川護熙（元総理大臣）がいる。また、郁姫の息子近衛忠房は甥の斉彬の養女貞姫を正室に迎えた。忠房は八月十八日の政変で、父と共に薩摩藩に協力して、長州藩の京都追放に尽力した。

島津家は、重豪の娘（先代の篤姫、広大院）が第11代將軍徳川家斉の正室に加えて、亀姫および郁姫によって五摂家筆頭の近衛家、先代と2代目の篤姫によって將軍家と姻戚関係にあり、斉彬の正室英姫は、一橋家当主徳川齊敦の娘という上流公家や徳川一門と姻戚の華麗な一族であった。英姫は斉彬の死から2ヵ月後、後を追うように亡くなった。

そのようなことから日本列島の南端にありながら京の公家や幕府内の事情に通じ影響力もあった。加えて、幕末には蓄積した財力と兵力があり、海外事情にも通じていた。これらは他藩に抜きんてた

ものであった。

さらに、郷中教育は、身体や精神の鍛錬に加えて、各種輪読会などに見られるように知的教育も行い、当時、薩摩の知的レベルは他藩に比べて高かった。幕末に活躍した諸藩は知的レベルが高かった。

薩摩隼人は勇猛果敢だけでなく、書を好み学識も豊かであった。そのような人材が多数いなければ、斉彬がいくら有能でも、短期間で、西洋の文物を採り入れた集成館事業の実現はできなかったであろう。

話を前に戻す。

当初、洗足池での散策を1時間程度と予定していたが、心地よいそぞろ歩きと話の盛り上がりで、思いのほか時間がすぎた。次に訪問を予定した泉岳寺を後回しにして、午後1時にランチを予約した薩摩にこだわる「セレスティンホテル」へ向かった。

このホテルは薩摩藩上屋敷跡内にある。そのレストラン「グラン・クロス」は薩摩をモチーフにしたアートで彩られ、鹿児島島の食材（ランチには伊佐米）を用いたメニューがある。

食後、NEC本社の植え込みに置かれた「薩摩屋敷跡」の碑を訪れた。斉彬が誕生したこの薩摩藩上屋敷は約2万2千坪、その跡地には、セレスティンホテル、戸板女子短大、東京女子学園などがある。



江戸時代の大名屋敷は、とにかく広い。江戸市民約100万人の約半数は参勤で出府した武士。その武士たちは大名屋敷内に建てられた長屋に居住した。大名屋敷と寺社敷地は、江戸の敷地面積の84%を占め、後の16%に人口の半分の町人が住んだ。

留魂碑の建立について述べる。

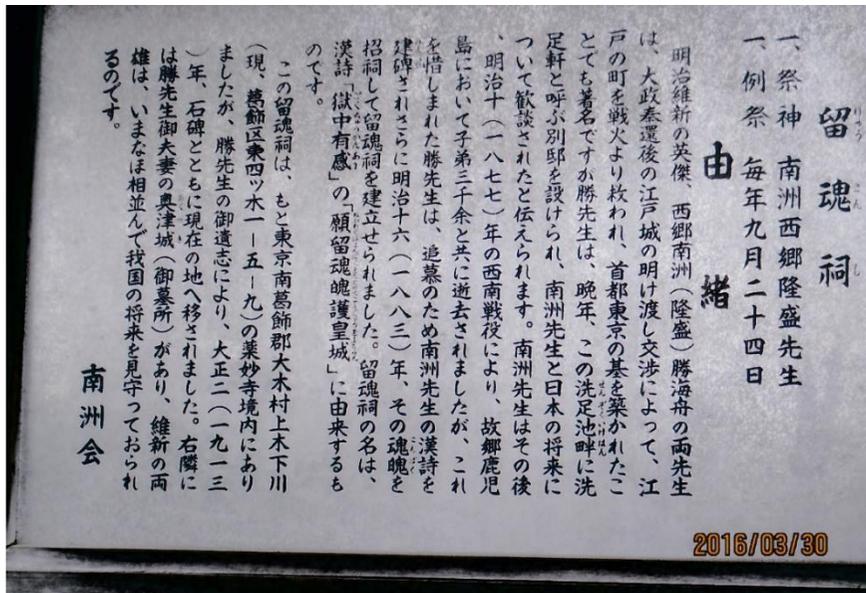
東京・大田区南千束、洗足池公園内に「留魂碑」の石碑がある。勝海舟は、これを西郷への記念碑として建立した。

「留魂碑」の表には、西郷隆盛が沖永良部島に流されていたとき、2度と島を出ることはないであろうという思いを込めた「獄中有感」の詩が刻された。

その詩の最後の行に「願わくば魂魄を留めて、皇城を護らん」とあることから「留魂碑」と呼ばれている。

記念碑の裏には、勝海舟が、西郷についての思い出とともに、「……ああ君よく我を知れり、而して君を知る亦我に若くは莫し……」と刻した。

「君は私のよき理解者であり、私も君の理解者である。私は、ほかの誰よりも君のことを理解している。私ほど君のことを理解している者はいない」と、断言して石に刻した。



西郷が西南戦争で没したのは、明治10年9月24日。それから1年半しかたっていないとき、勝海舟は西郷の思いを刻した記念碑の建立を思い立った。

明治12年3月18日、勝は東京・谷中<sup>やなか</sup>の石匠<sup>こうぐんかく</sup>廣群鶴に記念碑建立を依頼し、「仙台石」購入の手付5円、翌日には石代30円を渡した。

「仙台石」は宮城県石巻市稲井町井内で産出するため、稲井石または井内石ともよばれる。青黒く、厚さ20～30cmの見た目にどっしりしているため、今日でも全国的に使用されている。

「若無開運意推誠」の赤字で書かれた「無」は、西郷の揮毫でも、最初、「無」の字を書き忘れ、後から左端に小さく書き加えられた。記念碑でも、その通り忠実に刻された。

西郷は賊軍の首魁として、ましてや鹿児島から遠く離れた東京で、その慰霊も兼ねた記念碑の建立など、だれも言い出せない雰囲気の中で、勝は行動を起こした。

勝は西郷と江戸開城を流血もなく行い、明治維新政府では、参議兼海軍卿や元老院議員などに任じられたが、いずれも長く留まることなく辞任した。岩倉具視から誘われても辞退した。当時の政府高官たちの振る舞いが、西郷と同じように、勝も気に入らなかった。

明治10年10月、西郷の訃報に接した勝は、手許にあった亡友との往復書簡を「亡友帖」として1つにまとめた。

勝は西南戦争の初期のころ西郷軍が優勢だと思い、勝利するとすら思っていた。東京在住で生活に困窮している薩摩出身者に金銭的な援助を行い、政府から胡散臭く見られていた。

明治11年1月12日、日本橋<sup>ほづみ</sup>の穂積屋の清水卯三郎に草稿6枚を渡した。14日、穂積屋へ行き版木作成に着手の様子を見て50円を

渡した。穂積屋は洋書の輸入や出版を行っていた。

余談ながら、穂積屋の清水卯三郎は薩摩と無縁の人ではない。卯三郎は武蔵国埼玉郡羽生村（現在の羽生市）で造酒屋の3男に生まれた。20歳で江戸に出て蘭学を学び、30歳のとき、横浜で親戚が営む大豆屋で働きながら英語を習得した。

文久3年（1863年）、卯三郎34歳のとき、薩英戦争に向かう英国軍艦に英国側通訳として幕府の許可を得て同行し、英国艦船に拘束された薩摩藩の五代才助（友厚）、松木弘安（寺島宗則）を保護し、その逃亡中に実家や親戚宅で匿った。

五代と松木は、薩摩では英国に通じた裏切り者として命を狙われた。しかし、実際には、五代は英国艦船に拘束され、薩摩藩の兵力を尋問されると「今戦っているのは、薩摩兵の前衛であって、本隊ではない。本隊は後方に多数待機している」と答えた。これを聞いた英国艦隊は、薩摩の予想外の反撃もあって戦意を喪失させ引き上げた。

五代は、英国艦隊を引き上げさせた薩英戦争で最大の殊勲者である。しかし、このことを知る者は少なく、戦うことなく生きて敵の捕虜になった裏切り者と見られ命すら狙われた。



後に説明して誤解を解き、英国への薩摩藩留学生派遣の手配をし、ヨーロッパに渡り紡績機械や武器などの購入を行った。その武器は戊辰戦争で威力を発揮した。

明治政府への参画を幾度か誘われたが、実業界に活躍の場を求めて大坂へ行き、関西実業界の発展に貢献した。明治18年、五代の葬儀には、中之島の五代邸から淀屋橋、心齋橋筋、高麗橋通り、堺筋、

阿倍野墓所まで数千人が並んで見送ったという。今日の大阪商工会議所、大阪証券取引所、南海電気鉄道などの設立に関わり、いろいろな事業を興したが、蓄財に勤しむことなく、むしろ死後には借金百万円が残された。

2月14日、穂積屋で試し刷りができ60円を渡した。4月、穂積屋は定価1円15銭で「亡友帖」を発売。勝は、自宅への来訪者や徳川慶喜、松平春嶽、大久保一翁、楠本正隆（東京都知事）などに贈呈した。

西南戦争のとき、京で政府軍を指揮した大久保利通は、明治11年5月14日、石川県と島根県の士族刺客によって紀尾井坂（東京都千代田区紀尾井町）で暗殺された（享年49歳）。木戸孝允は明治10年5月26日、京都で病没（享年43歳）。これで、西郷を含む明治の三傑はいなくなった。

明治維新をともに戦い抜いた弟の西郷従道、従弟の大山巖、大親友の吉井友実などが存命にもかかわらず、勝は自分ほど西郷を理解している者はいないと言い切った。みんなが西郷を見殺しにしたという鬱積があった。そのよう気分で、勝は「留魂碑」の裏の文を刻した。

3月23日、西郷の書を石に彫る写本作成のために双鉤填墨を伊東南堂に依頼した。双鉤填墨とは、紙に書かれた文字の輪郭を極細の筆で写しとり、その中に裏から墨を入れて複製を作成すること。

先に述べた「……ああ君よく我を知れり、君を知るまた我にしくはなし……」は、西南戦争から1年半、その戦死者、政府軍約6,400

人、西郷軍約 6,800 人の記憶が生々しい時期にもかかわらず、勝があえて最も言いたかったことであろう。

西郷ほどの功労者に西南戦争を起こさせ、彼が明治維新に果たした功績、受けた恩義を忘れてはいませんかと言うのである。

吉井友実は、明治 11 年 9 月 24 日、西郷の一周忌「南洲私祭」を自邸で執り行った。伊地知<sup>まさはる</sup>正<sup>みちひろ</sup>治<sup>こぼでんない</sup>、岩下<sup>そえじまたねおみ</sup>方<sup>みちひろ</sup>平<sup>こぼでんない</sup>、木場<sup>そえじまたねおみ</sup>伝<sup>みちひろ</sup>内<sup>こぼでんない</sup>、副島<sup>そえじまたねおみ</sup>種<sup>みちひろ</sup>臣<sup>こぼでんない</sup>、宮島<sup>そえじまたねおみ</sup>誠<sup>みちひろ</sup>一<sup>こぼでんない</sup>郎<sup>そえじまたねおみ</sup>などが出席したが勝には案内がなかった。

出席者について少し記すと、吉井友実（薩摩藩士、加治屋町生まれ、西郷の大親友で、その遺児を明治天皇に拝謁させた。上野の西郷像建立の発起人）、伊地知正治（薩摩藩士、千石馬場町生まれ、禁門の変。戊辰戦争で活躍した軍略家）、岩下<sup>みちひろ</sup>方<sup>みちひろ</sup>平<sup>みちひろ</sup>（薩摩藩士、下加治屋町生まれ、慶応 3 年、パリ万博出展の「日本薩摩琉球国太守政府」使節団長）、木場<sup>なせ</sup>伝<sup>なせ</sup>内<sup>なせ</sup>（薩摩藩士、奄美大島名瀬で見聞役、西郷の島内生活の便宜を<sup>そえじまたねおみ</sup>図った）、副島<sup>そえじまたねおみ</sup>種<sup>みちひろ</sup>臣<sup>こぼでんない</sup>（佐賀藩士、西南戦争のときは中国に長期滞在し、中国文学の博識ぶりを称賛された）、宮島<sup>そえじまたねおみ</sup>誠<sup>みちひろ</sup>一<sup>こぼでんない</sup>郎<sup>そえじまたねおみ</sup>（米沢藩士、幕末から吉井友実と親交があった。戊辰戦争終結に奔走。維新後、自由民権運動に奔走）。

西郷隆盛と勝海舟が、最初に会ったのは、元治元年（1864 年）9 月 11 日。このとき西郷は 38 歳、勝は 4 歳年長の 42 歳。

場所は大阪、勝が海軍塾を開くなど活動の拠点にしていた<sup>せんしょうじ</sup>専稱寺（当時北鍋屋町、現大阪市中央区淡路町 3 丁目）であった。

このとき、西郷は勝から、大きな影響を受け、その後の活動方針を



勝海舟

西郷隆盛

大転換させ、それが後の日本の命運を決し、明治維新がなされた。

2回目は、3年半後の慶応4年(1868年)3月13日、高輪の薩摩藩中屋敷で会った。芝三田の上屋敷は、前年12月25日、庄内藩と幕府に大砲を撃ち込まれるなど焼き討ちされ、戊辰戦争への戦端が開かれた。江戸開城についての本格的な談判は、3月14日、海岸沿いの蔵屋敷で行われた。

(第一次)長州征討にあたり、尾張藩主徳川慶勝<sup>よしかつ</sup>を総督に、越前福井藩主松平茂昭<sup>もちあき</sup>を副総督に、西郷は大参謀に任じられた。

松平茂昭は京まで兵を進めてきたが、徳川慶勝は尾張から動かなかった。禁門の変で長州を京から追い払った西郷は、勅命を得て一挙に長州を壊滅させるつもりでいた。ところが幕府内部の足並みが揃わない。

大坂に滞在中の老中阿部正外<sup>まさと</sup>も、このことを苦慮し、9月9日、神戸にいた勝を大坂に呼び出した。その勝に会うために、西郷は、9月11日朝、京から大坂へ行き、勝に面談申し入れの手紙を書いた。

勝は西郷から手紙を受け取るとすぐ、大坂での拠点にしていた専稱寺<sup>せんしょうじ</sup>に招いた。勝と面識があった吉井友実、藩主から勝宛てに手紙を持参した福井藩士の堤五市郎<sup>まさよし</sup>(正誼、明治天皇侍従、貴族院議員)と青山小三郎<sup>ただす</sup>(貞、貴族院議員)の4名は専稱寺を訪れた。

勝は西郷に会う前に、京で老中阿部正外に会って、長州征討について、薩摩から長州藩の領地を没収して、朝廷と長州征討軍に参加の諸藩で分け取りにしようとの提案があったと聞かされていた。

その首謀者本人から会いたいと手紙を受けて、会うことになった。後に西郷は官軍を率いることになり、勝は江戸開城について西郷との交渉に実質全権を委任されることになる。





欧米列強の脅威に備えて富国強兵を早急に図るために、西郷は、「明賢の諸侯」も中央政治に参画させる「共和政治」を目指す決意を固めた。

その「明賢の諸侯」には雄藩の長州も加えるべきだと考え、長州抹殺から方針をガラリと変えて、軽い処分で収めて長州を存続させた。第2次長州征討では幕府の出兵要請を拒否した。

西郷と勝の2回目の会談は、江戸薩摩藩蔵屋敷で、江戸開城について行われた。

このとき、勝の要望で江戸総攻撃を中止したのも、先の長州に穏当な処分を下したときと同じで、国内での争いを避けて外国の脅威に備えるものであった。



ペリー来航以後、日本にとって緊急課題は、欧米列強に蹂躪されないための富国強兵であった。尊皇佐幕も尊王攘夷も富国強兵では一致していたが、それを行うための主導権争い大義名分の違いでしかなかった。

欧米列強の脅威を跳ね返す富国強兵を成就できるのであれば、倒幕の必要はなく王政復古を唱えることもなかった。

明治維新をもたらしたのは、徳川幕府による封建制度に問題があったというよりも、徳川幕府の中核に、欧米列強の脅威を跳ね除け富国強兵を図ることができる人材がいなかったことが、徳川幕府を瓦解させた。徳川幕府は倒されたというよりも、内部から溶解した。鳥羽・伏見でも十分に戦える兵力、特に海軍力があつたにもかかわらず戦えなかった。

さて、話を「留魂碑」建立に戻す。その建立に際して、勝は西郷の大親友吉井友実などに了解を求めた。明治12年7月30日、勝は「留魂碑」を建立し、浄光寺（東京葛飾区東四ツ木）に永代借り受け寄付金を収めた。

「留魂碑」は、勝の私財で建立されたが、その翌々年の明治14年11月6日、吉井友実、税所篤（一時、西郷、大久保と並ぶ薩南の三傑と言われた、子爵）、宮島誠一郎らが訪れ、明治16年には、「留魂碑」周辺の400坪を買い足して松や梅を植える相談をした。

「留魂碑」は、最初、東京・葛飾区木下川の浄光寺に建立され、大正12年（1913年）、勝の没後、洗足池の勝の墓所の傍らに移設された。

洗足池には、予期していなかった名馬「池月」の像があった。「池月」は、宇治川の先陣争いで「磨墨」とともに知られる名馬である。

平安末期寿永3年（1184年）1月、鎌倉の源頼朝から派遣された源義経と木曾義仲が、京都近郊の宇治川をはさんで対峙したとき、義経軍は敵方から浴びせられる矢をもものともせず渡河を強行した。そのとき義経配下の佐々木高綱と梶原景季が一番乗りを競った。これが、世に名高い「宇治川の先陣争い」である。

「池月」騎乗の高綱は、渡河の途中、先行する「磨墨」騎乗の景季に「馬の腹帯が緩んでいる。締めなおせ」と声をかけた。景季は馬を止めて、腹帯を締めなおした。その間に、高綱は追い抜いて、先陣争いに勝利した。「池月」「磨墨」とともに頼朝から拝領の名馬であった。



鹿児島の開聞岳の近くに九州最大の池田湖がある。池田湖は日照り続きでも水量が豊かで、風がなくても突然、大きな波がたち、湖底には龍が棲んでいると恐れられ、人々だけでなく、鳥や獣も近づかなかったという。

ところが、開聞岳の麓で育った白馬の母馬と仔馬の2頭は、毎日のように、池田湖へやってきて、白いたてがみをなびかせながら、並んで対岸まで泳いで戻ってきた。

その様子は、白竜が並んでいるように見えたという。竜宮からきた竜馬の子孫だともいわれた。この噂は遠く離れた鎌倉まで聞こえ、頼朝から献上を求められた。仔馬だけ鎌倉に連れていかれた。

母馬は仔馬が連れ去れた方角に向かって悲しげな鳴き声を立て続け、さびしさのあまり何も食べなくなった。

それから7日目、母馬は仔馬と泳ぎを楽しんだ池田湖に飛び込み、中ほどまで行くと、何回も弧を描いて渦巻きを起し、やがてその中に消えていった。仔馬は頼朝のもとで、「池月」と名付けられた。

これは、幼いときに聞いた鹿児島に伝わる伝説である。「池月」は、武者絵でも白馬として描かれている。

ところが、洗足池千束八幡神社の「池月」の銅像は蒼い。

これには次のような伝説がある。

「宇治川の先陣争い」の4年前の治承4年(1180年)、頼朝は源氏再興の挙兵をしたが、石橋山の戦いに敗れ、鎌倉へ逃れた。その途中、洗足池の畔で宿営し、



後続諸将の到着を待っていた。そのようなとき、どこからともなく

1頭の馬が大きな<sup>いなな</sup>嘶きとともに現れた。その馬は、馬体は逞しく、蒼い毛並みに白い斑点を浮かべていた。

「池に映る月影のよう」であったことから「池月」と名付けられ、頼朝の乗馬にされた。白馬が月の光で蒼く見えたのであろう。それほど名馬に飼い主がいはいはないはずはない。頼朝は、この名馬の出現を平家との戦いに勝利する吉兆として、征旗を高らかに掲げた。ということから、千束八幡神社は「旗上げ八幡」と呼ばれている。

世に言う源平合戦、治承・寿永の乱で、島津家初代当主<sup>ただひさ</sup>忠久は、平家追討での武勇を称賛され、馬の<sup>くつわ</sup>轡をかたどった「丸に十」の字の紋所を与えられた。島津家の元々の紋所は「鶴丸」、鶴丸城はこれに由来する。忠久の母が、頼朝の乳母であったことから忠久は目をかけられていた。

建久8年（1197年）12月、大隅・薩摩・日向の広大な島津荘の守護に任じられた。このときから島津を名乗るようになった。これ以前は<sup>これむね</sup>惟宗。

あれやこれやで洗足池での散策の時間は予定よりも伸びた。

午後1時に予約を入れた「セレスティンホテル」でのランチで、満留紀弘くんと角洋子さんが合流。食後、ホテル脇の「芝さつまの道」を歩き、薩摩藩上屋敷跡の碑を見て、それから徒歩で、「江戸開城会談の地」の碑を訪れた。



慶応4年（1868年）3月14日、三田の薩摩藩蔵屋敷で、西郷隆盛と勝海舟は、江戸開城について会見した。翌15日は、江戸総攻撃の日と定められており、東海道、中山道、<sup>とうきんどう</sup>東山道からやってきた官軍は江戸を包圍して待機していた。

この会見については話が長くなるので、別の機会に述べることにする。端的にいうと、両雄の先見の明と信頼関係、そして決断によって、江戸は戦火を免れ、外国に干渉の隙を与えることなく明治維新を成し遂げた。このことが「留魂碑」の建立に繋がっている。

この後、赤穂義士の菩提寺である泉岳寺を訪れた。ここも鹿児島とは縁が深い。鹿児島には郷中教育のころから伝わる三人行事「曾我どんの傘焼き」「妙円寺詣り」「赤穂義士伝輪読会」がある。これらは「郷中教育」の必須行事であった。輪読会は、約200頁もある赤穂義士の物語を徹夜で読み通すものである。

時は鎌倉時代、源頼朝が主催した富士の裾野での巻狩りで、曾我兄弟（十郎・五郎）は、皆が寝静まった深夜、雨傘に火をつけ松明にして、親の仇工藤祐経の寝所を襲って討ち取った。

「曾我どん…（曾我兄弟の仇討ち）」と「赤穂義士…」に、義弟（妻の弟）渡辺数馬を助太刀して36人斬ったという剣豪荒木又右エ門が活躍する「伊賀越えの仇討ち」を加えて、日本の三大仇討ちという。

「曾我どん…」と「赤穂義士…」は、親に孝と主に忠を、「伊賀越え…」は武士の意地を示す仇討ちの代表的なものである。

初夢に縁起がよいものに「一富士、二鷹、三なすび」がある。

「一富士」は、「富士」の裾野で巻狩りが行われたとき、曾我兄弟が仇の工藤祐経を討った。

「二鷹」は、播州赤穂藩浅野家の家紋が、丸に「鷹」の羽違い。



「三 なすび」は、仇討ちがあった伊賀越え（三重県伊賀市小田町）の辺りは「なすび」の有名な産地であった。

「妙円寺詣り」は、島津義弘が関ヶ原から苦難の退陣を偲ぶ行事である。慶長5年（1600年）の関ヶ原合戦を偲んで、10月20日、鹿兒島市内から伊集院の妙円寺まで約20kmを武者姿で夜を徹して歩いた。

筆者が玉龍高校在学中の1960年初め、武者姿で夜を徹して歩くようなことは行われていなかった。それでも「妙円寺詣り」の一環として剣道大会があった。それに、筆者は剣道部員として、授業がある平日、授業を受けることなく、列車に乗って剣道大会に参加した。

今日では、旧来の伝統的なものに復し、10月第4日曜日、武者姿での「妙円寺詣り」が行われている。

赤穂藩主浅野内匠頭たくみのかみは、元禄14年（1701年）3月14日、江戸城松の廊下こうげで高家の吉良上野介こうずけのすけに斬りつけた。殿中で刃傷におよんだ罪で、浅野内匠頭は即日切腹、赤穂藩は、お取り潰しになった。

赤穂藩お取り潰しで浪人になった47士は、主君の無念を晴らすために、元禄15年12月14日の月命日に吉良邸に討ち入り、上野介を討ち取った。

講談などで「本所松坂町の吉良様のお屋敷.....」というが、討ち入り当時は「本所1ツ目」とよばれ、幕府の御竹蔵おたけぐらがあった跡に旗本松平登之助が屋敷を構えた。

上野介は、刃傷があった年の8月19日、なぜか江戸城近くの呉服橋から本所に屋敷替えを命ぜられたとき、松平登之助の屋敷（敷地約2550坪、建て屋約900坪）を譲ってもらった。討ち入り後、吉良屋敷が壊され、後に松坂町とよばれるようになった。

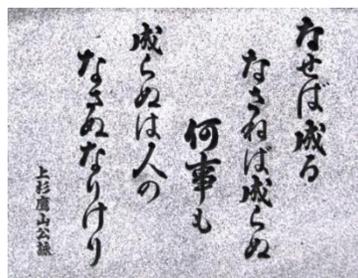
47士の墓は浅野家の菩提寺泉岳寺にある。泉岳寺は徳川家康によって、今川義元の菩提を弔うために建立された。その後、大火で焼失した。第3代将軍家光の命により、毛利・浅野・朽木・丹羽・水谷みずのやの5人の大名が再建に努めた縁からこれらの菩提寺になっている。



毎年、義士討ち入りの12月14日に行われる「義士祭り」には大勢の人出であり、義士にあげる線香の煙で足元が見えないほどである。東京の暮れの風物詩の1つである。

さて、忠臣蔵で、大野九郎兵衛といえ、家老でありながら、初期の籠城の意見には賛成せず、お金を持ち逃げした不忠者の代表ということになっている。ところが、そうでもなかったようである。

内村鑑三著「代表的日本人」には、西郷隆盛、上杉鷹山ようざん、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮の5人が書かれている。上杉鷹山はるのり（治憲）は、義士討ち入りから50年後の宝暦元年（1751年）、日向高鍋藩秋月家の次男（秋月松三郎）として江戸で誕生。10歳のとき、米沢藩主上杉重定の養子になり、17歳で家督を継いで藩主になった。



当時の米沢藩は参勤交代の費用にも苦勞するほど困窮し、鷹山は藩財政立て直しに努めた。また、正室の幸姫（重定の娘）は重度心身障害者で、身体と知能の発育は10歳程度であった。

鷹山は19歳のとき、17歳の幸姫と婚姻したが、結婚生活は営めなかった。鷹山は鶴を折り、幸姫が作った人形を褒め、優しく世話を

した。その鷹山の精神的な支えになり、財政再建を助けたのが、細井平洲であった。

西郷隆盛は大島に流されるとき平洲の教えが書かれた嬰鳴館遺草を他の書籍とともに携行し、その教えに深く心服し「南の平洲」でありたいと号を「南洲」とした。

その平洲が、明和8年（1771年）4月、鷹山に招かれて江戸から米沢を訪れたとき、米沢の入り口の板谷宿で大野九郎兵衛の墓があると聞いた。墓といっても「南無阿弥陀仏」、脇に「明和六年己丑七月十六日 施主佐藤氏」とだけあった。佐藤氏は、平洲が宿泊した宿（大坂屋）の主人で、代々、その墓を守っていた。



大石内蔵助と大野九郎兵衛は、赤穂城明け渡しの前に相談した。内蔵助は、江戸で吉良の討ち取りを図るが、吉良の実子で米沢藩に養子に入り藩主になっている上杉綱憲を頼って米沢に逃げ込むかもしれない。そのときには、九郎兵衛が一隊を率いて板谷峠で待ち受けて討ち取る手はずにした。

内蔵助が吉良邸に討ち入り本懐を遂げたとの報に接した九郎兵衛は、この世に思い残すことなしと切腹した。その心情に打たれた宿屋の主人が、切腹した場所に墓碑を建てた。

吉良上野介の娘に鶴姫というのがいた。鶴姫は、延宝3年（1675年）2月29日、薩摩藩第3代藩主島津綱貴のもとへ輿入れした。当時、鶴姫は16歳、綱貴は26歳。結婚から5年経っても子供ができず、延宝8年（1680年）11月20日、鶴姫は離縁された。これで、島津家と吉良家との縁は切れた。

それから22年後、元禄15年（1702年）10月18日、芝の薩摩藩上屋敷が類焼した。大急ぎで修復が行われ、網貴は吉日を選んで12月15日に上屋敷に戻った。その途中で、泉岳寺へ引き上げる赤穂義士一行と遭遇した。赤穂義士は道を譲り、網貴一行を丁重に通した。薩摩藩上屋敷と泉岳寺は東海道に面し、その距離は約1.6km。

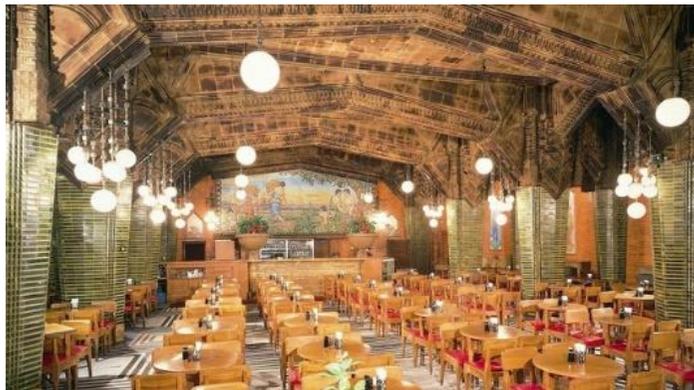


鶴姫との婚姻が継続していたら義理の父を討った赤穂義士一行を見逃すわけにはいかない。見逃せば、幕府から士道忘却の罪を問われ、赤穂義士を討ち果たせば世間の評判を害し、それとなく赤穂義士を支援していた幕府から意地悪をされたであろう。

泉岳寺を後にする頃には、万歩計は2万歩を越えていたという。

「お疲れですか、どうでしょう？」と問うと、予定通り「銀座ライオン」でビールだという。

ヨーロッパの香りを漂わせる老舗ビアホールで、ビール片手に、話題はあれこれ飛び交い時間の経つのを忘れ、元気を回復してそれぞれの家路についた。



「追補」

昭和 14 年 5 月、遷都 70 年の東京市から鹿児島県の南洲神社に常夜灯が贈られ、感謝が刻されていた。脇には勝海舟の西郷を偲ぶ歌碑がある。



江戸ノ開城セラルルヤ西郷南洲  
勝海舟両翁ノ折衝ニ依テ兵火ノ  
厄ヲ免レ以テ大東京殷盛ノ基ヲ成セリ  
茲ニ奠都七十年ヲ記念トシテ  
感謝祭ヲ行ヒ常夜灯ヲ建ツ



ぬれぎぬを  
ほさんともせず  
子供らが  
なすがまにまに  
果てし  
君かな  
勝海舟